

『児童・生徒の社会に対する見方・考え方』1957年5月（明治図書）

## 教育現実を改造する研究

生徒や児童の意識の実態をしらべて、学習指導をしなければならぬということは、理論としては百も承知のことである。けれども実際に、そういうことが行われているかということ、案外行われていないのである。

もちろん教師は、何らかの意味で児童本位の意識の実態を知らなければ学習指導は出来ないから、それぞれ児童・生徒を見てはいる。その見たものを土台として、学習指導を行っているのである。けれども、それが果して科学的だろうか、と反省してみると、自信がない場合が多い。自分の見たものは、自分のカンだけにたよっているのではないかというような気がして来る。

そこで何か、もっと一般的な、普遍性のある児童の発達段階のようなものはないだろうかと求めるのである。指導要領などを見ると、極めて一般的なものが出ている。これはまた余りに一般的すぎて、何か雲をつかむようで、それを具体的なものにどう適用してよいかわからない。

さてそうなると、具体的に且つ普遍性のある意識の発達段階は、われわれ自らつかむ以外手はないのである。そこで、今度のような形式で、多くの先生方の協力によって、その第一歩をふみ出したのだと思う。

この研究の過程で数回、私は先生方の相談にのったのであるが、具体的な学習指導の内容に即して、そのことについて児童・生徒がどういう意識をもっているかということ进行分析することは大変むずかしいということがわかったのである。

従来、何か一般的に、児童・生徒の発達段階を知って、これ位の子どもは、この程度の意識だということを手っとりばやく把握出来ないかというように考えたが、そういう考え方は甘いのだということがわかったのである。

本当に一つ一つ、それこそ小さな問題について、例えば、三年生位の子どもはみんなのもの（公共物）ということはどう考えているかというようなことをしらべて行く。学習指導では、だんだんにそんな言葉が使われている。余り説明もしないで当り前のように使われている。ところが、それについて子どももっている意識は、大人の考える程そうはっきりと割り切れていないのである。そこで学習指導の内容はこうしなくてはならぬということがわかって来る。

こういうように細かい、具体的な問題の一つ一つしらべて行かなくては、本当に学習指導に役立つ発達段階をおさえたことにならないのではないか。ところで、問題は、こういうように細かいけれども、これをわれわれが納得の行くように把握するとすると、必ずしも那么容易ではないのである。調べる方法の構想を立てることもむずかしい。対象を多くとらなくてはならぬ。つま

り科学的に把握するという事は相当な手間のかかることだということである。

こう考えると、児童・生徒の発達段階をおさえて学習を指導するといっても、これはなかなかむずかしい事で、多くの教師の考え方が科学的になり、多くの調査が行われ、それらの資料が沢山積みあげられたときにはじめて、発達段階を科学的に考慮した学習が行われるようになるのである。

この報告書は、そういう多くの先生の協力によって、科学的、客観的データを積みあげる最初の試みとしての意味をもっていると思う。多くの先生が、こういう研究の仕方になれ、協力の仕方になれて来て、あらゆる所で協力が行われるようになったとき、本当に科学的な教育も行われるようになるであろう。教育を進歩させるということは、こういう実践的な歩みを発展させることではないだろうか。昔の習慣に従って、一人ボッチで本を読んでいるというような研究からは、教育を進歩させるような力は生み出されて来ないのではないだろうか。

国立教育研究所 矢 口 新